生野銀山孝義傳

序

善人之産二僻鄕一也、其猶二金銀之産一深山一乎、苟非レ有二識而採一之者、則舉世莫レ知二其爲一寶也、但馬生野、自二銀坑始開一吾不レ知二其幾多年一矣、官設レ府置レ吏、與レ民分レ利、而戸口蕃息焉、始識二山之有一銀而鑿レ之者、其功不二亦大一乎、今之縣令勝田君、謂、地旣富庶、不レ可レ無レ敎、乃擇二可レ爲レ師者一、予薦二小川民德一、民德司鐸三年、能稱二其職一、客歲丁未之夏、民德奉二君之意一、採二訪鄕之善人一得二孝義之民一若干人、君賞二賜之一以勵二其餘一、民德於レ是各審二其行實一、記以二俗文一名曰二孝義傳一、欲二刊而傳一之遠邇一、而君許レ之、夫生野非二古者無二善人一、而今始有レ之、其顯晦在二人之識與一不識一、則民德之功、可レ謂レ不レ減、始識二山之有一銀而鑿レ之者一矣、且金銀之爲二世寶一、一鎰止二一鎰一、千鎰止二千鎰一、抑人則異二乎此一矣、聞者感而興焉、見者慕而化焉、一鄕之善、可レ爲二一國之善一、一國之善、可レ爲二天下之善一、善人之爲二世寶一豈金銀之所レ可レ比乎哉、是民德之所下以欲レ刊二行是書一而君許之、予安得レ不下序二其美事一而揄揚之上哉、

嘉永元年嘉平月

浪華小竹學人篠崎弼撰并書

清少納言のさうしに、あはれなる物といふくだりに、けうある人の子をかぞへられたる、まことにさることなり、すべて孝のみにもあらず、まめやかなる人のやつこ人のめなどの、くるしき道にも、いとよくたへすぐして、いつくべき人のために、身をもわすれていそしびたるもの、いづれかあはれならざらむ、されども世中の、とありかくあるならはしの、はしたなきに打まぎられて、そのあはれのかぎりをつくす人、いくばくかあらむ、さるをこたび、たぢまの國いく野のさとに、さるあはれ人あなりとて、おほやけよりほめさせ給へりし事のもとすゑを、かしこなるからまなびの師小川氏より、わが友春日願がもとにしるしおこせて、かんなぶみにしるさんことを、おのれにあつらへこはるゝまに、はじめよりつぶ〳〵とよみもてゆくに、げにいと心ぐるしく、あはれなるかぎりにて、おに神もほと〳〵なきつべくおもほえて、先ほろ〳〵とこぼれぬかし、されば筆のつたなきはさる物から、これはしかいみじくあはれなる人のためにするなれば、さばかりいなむべきことにもあらずと、われたけくなりて、さとびぶみにうつしかゝんとするに、文詞のかざりなど、今すこし心をやりてたくみなば、事がらのあはれさも、たちまさるべくおぼゆれど、さてはまめやかにいとなまれたる、小川氏のこゝろにも、かへりてはそむきつべければとて、いさゝかもつくろはず、またいさゝかももらさず、ありのまゝにうつして、春日がりかへしやりつ、あはれこのふみの、世中にみちひろごりて、このいみじくあはれなる人どもをほんとして、さがなき人の子、ひとのやつこらが、ものゝあはれしるたづ